

<研究報告>

C・L・R・ジェームズ, パドモア, シクルマ
—クワメ・シクルマの政治思想(四)—

阿久津昌三 信州大学教育学部

キーワード: ジェームズ, パドモア, シクルマ, ブラック・ディアスポラ, 環大西洋地域

1. C・L・R・ジェームズとの出会い

クワメ・シクルマ(Kwame Nkrumah)(1909-1972)は, C・L・R・ジェームズ(Cyril Lionel Robert James) (1901-1989) との出会いを『自伝』のなかで次のように述べている。

「大学での勉強とこれまでに述べたさまざまな活動のほかに, 私は時間をつくって, アメリカにある政治組織のなるべく多くを知ることにつとめた。そのなかに共和党や民主党から, 共産党やトロツキストまで含まれていた。その指導者のひとりC・L・R・ジェームズ氏に会い, 彼から, 非合法活動のしかたを教わった。また, アフリカ問題協議会, アフリカ委員会, 軍事=平和援助委員会, アフリカ人学生協会, 有色人進歩全国組織特別調査協議会, 都市連盟などとも知りあった。私の目的は組織の技術をつかむことだった」(Nkrumah,1957:44-45) (野間寛二郎訳による) (一部改変, 以下同じ)。

これはシクルマが語るC・L・R・ジェームズとの出会いである。それでは, ジェームズはシクルマとの出会いをどのように語っているのであろうか。

「私がシクルマを知るようになったのは1943年のアメリカにおいてである。彼と私, そして私の友人たちが親密な関係になったのは1943年から45年にかけてである。我々はシクルマに会うためにペンシルヴェニアやリンカーンに出かけた——そして, シクルマがニューヨークにやって来て, 彼の友人たちと1日か2日過ごし, 我々と意見交換をしたものだ。当時でも, シクルマは鋭い知性と知的エネルギーがあり, 人物的にも上品で, 身のこなしも魅力的で, 知りあった人たちとすぐに仲間になってしまう能力があった。このゆったりとした風格の背後には, シクルマの関心がアフリカ人の独立と自由にあることに我々は気づいていた」(James,1972:4-5)。

このジェームズの文章は, シクルマが1972年4月27日にルーマニアのブカレストの病院で, 62歳の生涯を終えた3か月後に出版された, 『ブラック・ワールド』誌の追悼号に寄せられたものである。マリカ・シェアウッドによると, この文章が書かれた20年後にジェームズと会ってインタビューをしたが「シクルマと知り合ったことをほとんど記憶していなかった」と書いている(Sherwood,1996:82n;115n)。

それでは, ジェームズとシクルマを結びつけた人間はいったい誰なのだろうか。ポール・ビュールの『革命の芸術家—C・L・R・ジェームズの肖像』(1988年)によると, ジェームズにシクルマを引き合わせたのはラーヤ・ドゥナエフスカヤ(Raya Dunayevskaya)(1910-

1987)であるとされている。ドゥナエフスカヤは、トロツキー(Lev Trotskii)(1879-1940)の秘書であり、第2次世界大戦に際して「ソ連は労働者の国家であるから防衛されるべきである」と主張したトロツキーに対して、かの女は「国家資本主義」を主張して彼と訣別した。マルクス、レーニン、スターリン以後と切り離すことで「自己の正統」を主張する亡命者のマルクス主義者として知られている。ドゥナエフスカヤは党内では「フレディ・フォレスト」(ビュール 2014:240)と名乗っていた。

ポール・ビュールは、C・L・R・ジェームズの『インクルマとガーナ革命』(1977年)は、ビュールが主宰する雑誌『ラディカル・アメリカ』に発表されたものをもとに書かれたものであると記述している。この雑誌は、「C・L・R・ジェームズの名前と彼の著作を社会運動の潮流のなかに引き入れるべく、運命づけられていた」と位置づけている(ビュール, 2014:9) (一部改変)¹⁾。

「ジェームズは傍観者としてずっとガーナ革命を研究し続けていた。ペンシルヴェニア州リンカーンで——そこではインクルマが大学に通い、ラディカルな方向性へと駆り立てられていた——ラーヤ・ドゥナエフスカヤによってインクルマを引き合わされたジェームズはアフリカ独立の潜在的指導者に出会ったとの結論をすぐさま引き出した。インクルマが後に語ったところによれば、ジェームズは彼に非合法行為が持つ価値とその術を教えたという。ジェームズによれば、インクルマは政治的に間違った教育を受けていたが、圧倒されるほど誠実で決意に満ちていたために、知的かつ政治的な助言者をひどく必要としていた。1943年から45年のあいだ、彼らがペンシルヴェニアとニューヨークで会った日々は、その男に欠けていたものを埋めるのに役立った」(ビュール, 2014:240) (一部改変)。

ジェームズは、1938年にイギリスからアメリカに渡り、トロツキスト運動のために大規模な講演旅行を開始していた。1940年にはラーヤ・ドゥナエフスカヤたちとジョンソン・フォレスト派を結成していた。翌年には、ミズーリ州南東部で活動をしていた。インクルマがジェームズに出会ったのは1943年で、ジェームズがニューヨークを拠点としていた時期であった。ジェームズと彼の小さな支援グループ(グレース・リーなど)は、マックス・シャハトマンを指導者とする労働者党と対立して、レーニン主義の解釈の違いを理由として、具体的にはジェンダー的偏向と、人種と植民地をめぐる見解の相違が背景にあり対立関係にあった。ジェームズと彼の党派はインクルマと会い、2年間、意見の交換をした。また、インフォーマルな勉強会において、ジェームズはインクルマにパン・アフリカン運動とトロツキズムの解釈を教えたという(Marable,1987:94)。

ジェームズとドゥナエフスカヤは労働者党の中に、固有の思想とシンパのネットワークをもつ「全体的な」派閥をつくろうと動き出していた。そのグループは、ジェームズを思想的中心として、ラディカル派のサロンとなったある家庭の周りに集まった、大部分がすぐれた女性たちによって構成された大きな勉強会を出発点としていたという(ビュール, 2014:153-154) (一部改変)。

ジェームズが後に主張するところでは「パドモア, エリック・ウィリアムズ, そしてそ

のほかの指導者たちは、民族解放の包括的な理論を物にしていた。その理論は、〈多くのマルクス主義に負いつつ私たちの以前の仕事に基づいており〉、また〈ガンジー主義の多くを吸収していた〉が、きわめて独自に目的と手段の双方を把握していた」（ビュール、2014:240）という。

ジェームズはシクルマに紹介の手紙をもたせて、パドモア(George Padmore)(1902-1959)と国際アフリカ事業局 (IASB) のもとに送り出した。その手紙の内容は、「ジョージ、この若い男が君に会いに行く。彼はとりわけ頭が良いというわけではないが、彼のためにやれるだけのことはやってほしい。彼はアフリカからヨーロッパ人を放逐するだろうから」というものであった (Sherwood, 1996:114; Martin, 1972:185; James, 1968:26)。

パドモアは、来たるべき闘争に向けてシクルマが必要としていた実地の訓練を施すことができた。数年のうちに、シクルマは黄金海岸に帰還し、会議人民党 (CPP) の指導者の地位についた。そして 1957 年には、彼は新たに独立したアフリカの国の最初の首相となり、ネルーやナセル、そのほかのあまり有名ではない人物たちとともに台頭するナショナリズムの主要な象徴となった。

「ジェームズ自身は、しばしば彼の特使たるグレース・リー(Grace Lee Boggs) (中国系アメリカ人の) とともに、1950 年代半ば以降はシクルマと定期的に会っていた。アメリカから追放された後、ジェームズは幼少期からの友人ジョージ・パドモアと再会した。その関係は、ジェームズが 1958 年に西インド諸島へ出発し、同年にパドモアが、シクルマのいるアクラへ旅立つまで続いた (パドモアはアフリカに骨を埋める気だったことが後に判明した。ジェームズはときには同じことを考えたが、同じ道を辿るまでには至らなかった)。1960 年に個人的にガーナを訪れたときから、1966 年のクーデター時に至るまで、ジェームズは公に批判することはしなかったものの、内密にシクルマに警告を与えていた」(ビュール、2014:241)。

2. C・L・R・ジェームズとジョージ・パドモア／シクルマとウィリアムズ

C・L・R・ジェームズとジョージ・パドモアはいずれもトリニダード出身の西インド諸島の革命家である。かれらが、国際共産主義運動とその第 3 インターナショナルと第 4 インターナショナルへの分裂に関与していたことはよく知られている。ジェームズは、『ブラック・ジャコバン＝トゥサン＝ルヴェルテュールとハイチ革命』(1938 年) という奴隷の革命とトゥサン＝ルヴェルテュールの反乱を掘り起こすことで、西インド諸島の歴史を再構成した。スパルタクス以来もっとも成功した奴隷の反乱の物語であり、近代世界におけるパン・アフリカ的な解放思想の最初の一撃の物語と言われている (ジェームズ、1938(1991))。また、『世界革命 1917—1936 コミュンテルンの台頭と没落』(1937 年) は、マルクス主義の問題と 1930 年代のブルーズベリ派が確信し期待もした世界革命をテーマとするものであった (「私はトロツキストの党における第 3 世界だった」) (ジェームズ、1937(1971))。

ジョージ・パドモアのばあいには、その関心は、西インド諸島よりもアフリカにあったことは重要である。パドモアは黄金海岸の独立前に招聘されンクルマの政治顧問となるが1959年に早世し、生前に書いた最も著名な書物には、『イギリスはどのようにアフリカを支配しているか』(1936年),『アフリカと世界平和』(1937年),『アフリカ—イギリスの第三帝国』(1949年),『パン・アフリカニズムか共産主義, 来るべきアフリカのための闘争』(1956年)などがある(Padmore 1936;1937;1949;1956)。

エリック・ウィリアムズ(Eric Eustace Williams)(1911-1981)は『帝国主義と知識人—イギリスの歴史家たちと西インド諸島』(1964年)のなかで次のように記述している。

「ジェームズとパドモアは、共産主義的伝統にたつ著作者として、イギリスで好ましからざる人物とみられたことは当然である。しかし、オクスフォード大学の卒業生であったウィリアムズのばあいには、オクスフォード大学がその発展に大きく寄与したイギリスの歴史的伝統への反逆者として、イギリスの敵対勢力が一丸となってかれを攻撃したのである」(ウィリアムズ, 1964(1999):335-336)。

これは、エリック・ウィリアムズの『資本主義と奴隷制—経済史から見た黒人奴隷制の発生と崩壊』(1944年)のことを指しているが、この本は一方では絶賛され、他方で激しく批判されたのである(ウィリアムズ, 1944(2004))。

「ウィリアムズは、もっぱらその展望と関心を西インド諸島に向け、国際的経験を生かして、西インド諸島の状況を明らかにしようとした。彼が『資本主義と奴隷制』で、奴隷廃止についてこれまでいい古されてきたイギリス的テーゼにたいして明確な攻撃をしかけている。かれによれば、奴隷制の廃止とは、経済発展の論理的帰結であり、経済発展の基盤としての奴隷制が不必要となった以上は、かつては世界の先端を切ってその経済発展をもたらした当の奴隷制も廃止されたのである、というものであった」(ウィリアムズ, 1964(1999):336)。

この同時代に、ンクルマとウィリアムズがそれぞれジェームズとパドモアとこのような接点があったという事実はいったい何を意味するのであろうか。ウィリアムズがトリニダード・トバコ出身のすぐれた歴史家であり、また同国が長い英領植民地支配から脱して1956年に独立を達成したのに対して、ンクルマは黄金海岸出身のすぐれた思想家であり、また同国の長い英領植民地支配から脱して1957年に独立を達成しているのだ。1945年の第2次世界大戦の終結とともに、イギリスは国力をかなり消耗しており、アジア、アフリカ、ラテンアメリカの辺境から大英帝国は崩壊し始めていたのである。

ポール・ビュールは『革命の芸術家』のなかで、次のように記述している。

「イギリス植民地主義の崩壊が本格的に始まった1950年代までは、効果的に変化を主導することをできそうにはなかっただろう。その頃にはエリック・ウィリアムズが現場に戻り(ある程度までは)まさにジェームズがなしえたであろうことをやってのけたのだ。確かにジェームズは、1940年代半ばのブロンクスでウィリアムズをパドモアに紹介し、立憲組織によって民族の自由のための計画を策定するよう二人を指導した。彼の助言者に対

する過去のふるまいによって判断すれば、ウィリアムズは、トリニダードに欠けていて、中産階級が自ら作りだそうともしない、大衆との政治的紐帯であるように思われた」（ビュール, 2014:251）。

ジェームズは 1918 年にクイーンズ・ロイヤル・コレッジを卒業すると学校の教師となったが、独りでもしくは生徒たちと一緒に西インド諸島の歴史とクリケットの歴史を同時に探究していたと回想している。この時の生徒が当時 11 歳か 12 歳のウィリアムズである。それ以来、ジェームズとウィリアムズは 40 年続く師弟関係となったが、ジェームズとンクルマのように、この関係性にはある距離をたもったジェームズの独特のスタンス（「いくぶんか控えめかつ距離をとったやり方」（ビュール, 2014:231））があった。これはいったいどのようなものなのだろうか。ポール・ビュールによると「ジェームズはエリック・ウィリアムズ博士に与えた政治的影響のように——彼は自らを観念の力で欺いたのだ」ということである。

「確かに、彼のように現代政治をギリシアの都市国家が中断したところから引き受ける市民運動として概念化することは、第三世界の民族解放の騒然とした文脈とはほとんど現実的には関係がなかった。さらに、最高幹部として運動に参加しようとするジェームズの傾向は、入り乱れた状況と渡り合うにあたって彼に不利に働いた。後に、年齢と健康状態が邪魔になって、彼は活動家としてよりも教師としてその身分を終えることになった」（ビュール, 2014:231）。

ジェームズは 1940 年代半ばのブロンクスでウィリアムズをパドモアに紹介し、立憲政治によって民族の自由のための計画を策定するように指導した。ウィリアムズが 35 歳の時である。

オクスフォード大学で『資本主義と奴隷制』という卓越した研究業績を残したが、研究生活に区切りをつけて 1948 年にトリニダードに帰還した。マーク・マゾワの言葉を使えば「戦争それ自体が変化の触媒」となっていたのである。ケニヤッタ、ンクルマなど、アジア、アフリカ、カリブ海出身のエリートたちも、ファシズムに対して開始された闘争を継続する意思をもって、ヨーロッパの戦闘から帰国していったのである（マゾワ, 2015:252）。ウィリアムズのばあいにはカリブ海域委員会の任務をはたすためであった。この委員会は英米の海軍基地のあった場所で健康及び労働環境の改善、戦時の輸送に関して協議する目的で 1942 年に設立されたものである。1955 年に「その立場を辞して物議をかもした後」、ウィリアムズは政治の世界に足を踏み入れることになったのである。人民国家運動（PNM）はイギリス植民地省の許可を得て 1956 年の選挙で勝利した。ウィリアムズは PNM の週刊機関紙『PNM ウィークリー』（後に『ネーション』）の編集者にジェームズに依頼した。しかし、『ネーション』は「あなたたち官僚のふるまいを批判的に見ている、すなわち党や政府の視点からではなく公けの視点から見ている」と通告するというスタンスをジェームズはとっていたため、PNM の役人たちを激怒させたりしていた。1958 年の独立の時にもジェームズは次のような警告を発している。

「イギリスの旗が降りて、国旗が掲揚される時、巡洋艦や兵士がもう来ることはないだろう。そしてあらゆる権力者は、ネーティヴなものに依存し、人びとの態度に安住している。民主主義はこの地域ではあまりにも多くの場所で到来することはなかったが、自ら試すことになるだろう」(ビュール, 2014:251-256)。

ジェームズがウィリアムズを批判するとき、ンクルマと会議人民党(CPP)が犯した間違いを見てとっている。つまり、ガーナで見た陥穽を繰り返すことを回避しようとしたのである。だが、それはンクルマ政権がクーデターで崩壊する約6年前のことである。

ジェームズの『ンクルマとガーナ革命』(1977年)はンクルマがクーデターで政権を転覆された11年後、ンクルマが死んだ5年後に出版されている。本書は第1部と第2部からなる。第1部は1958年前後に原稿が完成したとされる(Rosengarten, 2010(2008):43)。第2部は政権の斜陽期にンクルマたちに宛てたジェームズの手紙や演説の記録からなる。ジェームズの評伝を書いているポール・ビュールによれば、このような出版のしかたは、「典型的なまでにジェームズ的な戦略であり、とりわけ彼自身を含めた歴史的な脈にできごとを配置する」ジェームズ的な手法であると述べている(ビュール, 2014:245)。ジェームズ的な戦略あるいは手法は次のような語りのなかに見られる。

「ガーナと私の関係に終わりが来ることはなかった。1963年アクラで出版されている政治雑誌にンクルマから原稿を書くように依頼があった(筆者注・その論文の題名は『レーニンとその課題』1964年)。(中略)。はるか1958年のことだが、私はンクルマの50歳の誕生日を記念してレーニン著作集の装丁本を贈った。しかし、アフリカの政治家たちにはレーニンの予言的な警告や衝撃的な革命の解決案は、大海の中の一滴の血、汗、涙にしかならなかったように思われる」(James, 1982(1977):13-14)。

ジェームズの『ンクルマとガーナ革命』の詳細については後述するが、ジェームズはウィリアムズに対しても独立時と同様に教師のごとく繰り返し注意をしている。——つまり、ンクルマと会議人民党(CPP)が犯した間違いと同様に、ウィリアムズのもとには「日和見主義者」と「臆病者」が群がっているとジェームズは語り、「ウィリアムズ以外の党指導者はますます雑誌を完全に無視してもよいと考えるようになった」(ビュール, 2014:256-257)のである。

さらに、カリブ海域を研究しているイヴアル・オクサールによると、アメリカ軍がチャグアラマス基地を返還する代償として、アメリカ国務省がジェームズの追放を示唆したと述べている。

第2次世界大戦下のもとで西インド諸国の安全保障のために英米は協力関係を深めていった。1940年にイギリスはドイツ潜水艦に対抗するために海軍が必要とした50隻の駆逐艦を受領する引き換えに、トリニダード西北端のチャグアラマスを含めた3か所を基地としてアメリカに99年間貸与する協定を結んでいる。その後、基地問題は、1960年12月のウィリアムズと米国代表とのトバゴ島会談で決着している(北原, 2012:56,63)。①海軍やレーダー基地、電子設備など軍事上必須の設備を除いたチャグアラマスの広い空間をアメリ

カはトリニダードに貸与する。②すべての基地は1977年までにトリニダードに返還する。③その代償として、アメリカは首都とチャグアラマスとを結ぶ道路の整備、鉄道路線の修復、基地の余剰水の提供など（北原,2012:63）。

ジェームズとウィリアムズとの共闘も、1962年以降の西インド洋諸国の分離独立——逆に言えば、西インド連邦の解体、対アメリカ政策及びチャグアラマス基地問題をめぐる意見対立によって終わりをつけることになった。ジェームズは雑誌の編集者を辞めるにあたって、ウィリアムズ宛ての手紙のなかで次のように述べている。

「君は政治という場でとても安楽な時を過ごしてきたよ、ビル。君は政治闘争が何かということ、政党内部のそれという意味ではまったく知らないんだ。そのことで私は今とても心配になる。（中略）。もろもろ理由があったとしても、君が政党の再編を引き受ける立場にいるかどうかは疑わしいね。もしそうだとすると、君はある種の押し付けによってそれを実行するだろう。私が今のところ考えるには、君は性分から嫌々そうしかねない。

（中略）。私はそこで対立したくないし、そうすれば私は、きっと、不満を述べたりイライラしたりしながら、君が引き受けたり進んだりすることを拒むような道を擁護する者となるのだ。（中略）。この事業から手を洗いたいんだ」（James,1962:105）（吉田裕訳による）。

また、ジェームズは、後に、次のように付け加えて述べたという。

「私たちの生きる途方もなく残酷な時代（人類史においてもっとも残酷だ）においては、政治家は何よりも己を監視しなければならない。しかし、同僚やさらには政党が彼を監視してくれたなら、もっといいだろう」（James,1962:105）。

ジェームズはウィリアムズと会おうとし続けた。しかし、ウィリアムズはジェームズと手を切ることになった。ジェームズの芸術と政治思想史に関する講演をもとに『現代政治』（1960年）が出版されたが、ウィリアムズはその本を押収し発禁処分とした。その翌年、ジャマイカでの自動車事故のためにジェームズは無意識となり、まもなく快方に向かったジェームズはイギリスに旅立つことになった。

ウィリアムズとンクルマにとってジェームズとの媒介者となったジョージ・パドモアとはどんな人物であったのかをとりあげておきたい。

ジェームズとジョージ・パドモアは子ども時代に友だちであった。パドモアは生まれた時にはマルコム・ナースという名前であった（Hogsbjerg,2014:79-81）。

「ジェームズ自身が語るところによると、かれが1932年にイギリスに着いたときくあの有名なジョージ・パドモアがグレイスインロードで講演する予定だと聞いたという。当時の新しいものをすべて見たいと躍起になっていたかれは、ホールに着いてみると、その講演者がなんと少年時代からの友人であるマルコム・ナースだということを知った。

ニューヨークでパドモアの書いたパンフレットを読んでいたラス・マコーネン、その数カ月前にはパドモアの正体に見当をつけていて、かれがイギリスに行ってしまったことを残念に思っており、やがてその後を追った。マコーネンはすでにパン・アフリカニズムに傾倒していて、マルクス主義のイデオロギーに魅力を感じなくなっていた。このとき、

まだジェームズはこうしたことに対して無知だったが、それは長くは続かなかった」(ビュール, 2014:81)。

パドモアの祖父アルフォンソ・ナース (Alphonso Nurse) はアフリカ人で、西インド諸島のバルバドスのベル・プランテーションに奴隷として生まれた。アルフォンソ・ナースは石材の取引を学び、後にトリニダードに移住した。パドモアの父、ジェームズ・ナース (James Nurse) はロンドンを基盤とした名声のある昆虫学会の会員であり、カリブでは著名な植物学者であった。論争を避けていたジェームズの父と違って、パドモアの父は植民地政府の意見に逆らうことまでしている。ビュールによれば「そうした勇氣あるいはむこうみずに対して、かれはひどい代償を払った」という (ビュール, 2014:55)。

このような家系のなかでパドモアは 1902 年 (または 1903 年) アロウカで生まれた。少年時代を英領トリニダード・トバゴの首都ポート・オブ・スペインの中産階級の居住地域で過ごした。名門の聖メアリー中等学校を卒業すると、これは 19 歳の時であるが、日刊紙『トリニダード・ガーディアン』の新聞記者として経験を積むことになった。この新聞は植民地官僚や白人の利益・目的のために広報するためのものであり、1924 年にこの新聞社を辞職し、渡米し、フィスク大学を経てニューヨーク大学、ハワード大学の法学院で法律を学んだ。パドモアにとって黒人意識の目覚めと反植民地主義の闘いが磨かれることになる。1927 年にアジキエとパドモアはアフリカ人学生協会を組織することに尽力することになる。

パドモアはアメリカ共産党のシンパとなる。ニューヨークでは『ディリー・ワーカーズ』誌に原稿を投稿し始める。また、ハーレムにおいて黒人向け党機関紙『ニグロ・チャンピオン』(後に、『リベレーター』と改称) という共産党系機関紙の編集に携わる。さらに、共産党と密接な関係にあるアメリカ・ニグロ労働会議で働くことになる。1929 年にはロシアのモスクワに旅行し、アメリカにおける労働組合活動について報告している。帝国主義のもとでの植民地解放を獲得するための効果的な反植民地主義戦略を模索していた時期である。1930 年代には『モスクワ・ディリー・ニュース』誌に黒人に関する原稿を投稿している。新聞では『クライシス』『シカゴ・デフェンダー』『バルティモア・アフロ=アメリカン』に記事を書いている。また、トリニダード・トバゴの週刊誌——『ピープル』『ヴァンガード』『クラリオン』などがあげられる。油田従事者労働組合の機関紙などの原稿も執筆していた。

3. ジョージ・パドモアと西アフリカ学生同盟

ンクルマをジョージ・パドモアに手紙で紹介したのは C・L・R・ジェームズであることはすでに述べた。ンクルマがロンドンを訪れたのは 1945 年 5 月である。パドモアとユーストン駅で待ち合わせたという。ンクルマは『自伝』のなかで次のように回想している。

「イギリスにいる人間で、私が前から知っていたのはジョージ・パドモアひとりである。西インドの新聞記者でロンドンに住み、記事をいくつか書いていたが、それに私は興味と

共感をいただいていた。私は彼の記事に深く感動してアメリカから手紙をだし、イギリスに着いたらユーストン駅で会いたいと頼んでおいた。返事がくる前にアメリカを出発したので、彼の返事をうけとることができず、彼が駅にいるかどうかは全然わからなかった。私は汽車から降りて、不安な気持ちで彼を探しながら、プラットホームをいったりきたりした。二人は同時に顔をあわせた。最初のその瞬間から私は彼が好きになった。ロンドンに来たばかりの私を、いろいろ助けてくれた。彼をよく知り、話をかわすにつれて、彼の植民地問題についての深い知識を私は尊敬するようになった」(Nkrumah,1957:49) (野間寛二郎訳による)。

そして、シクルマは続けて次のように語る。

「パドモアが私を最初につれていったのが、西アフリカ学生連盟 (WASU) のホステルである。このホステルに部屋を借りる約束をしておいたのだ。だが建物へは行って見て、そこが私の目的に長くは適さないことを知った。ホステルの空気は冷たく、形式的で、私の不規則な生活がみとめられそうにも思えなかった」(Nkrumah,1957:49) (野間寛二郎訳による)。

WASU についてはその創始者であるラディポ・ソランケに着目した落合雄彦らによる研究がある (Garigue,1953;Olusanya,1982,落合,1993,1998a,1998b,2011;Adi,1998)。WASU のホステルは、最初に 1933 年 1 月、ロンドン北部のカムデン・ロード 62 番地に開設された。3 階建てのもので、宿泊する部屋のほかホール、ビリヤード室、図書室、読書室、遊戯室、客間、キッチンなどの設備があった。その後、WASU は 1938 年 7 月、カムデン・スクウェアのサウス・ヴィラズ一番地に移転している。1944 年 1 月、WASU はホステルを「所有・経営する法人化登録」を行い、49 年にはサウス・ヴィラズに加えてテムズ河畔のチェルシー・エンバクメント 13 番地に新たなホステルを設置している (落合,1993:365-366)。

シクルマは西アフリカ学生同盟について『自伝』のなかで次のように述べている。

「私の最初におこなったのは西アフリカ学生同盟に加わることで、後に同盟の副会長になった。同盟は、それまでにいろいろな組織形態をとったのち、今では新しい学生の世話 (特に、宿舎の調達と、法学協会や大学への入学の斡旋) をする一方、西アフリカの状態の改善を植民地省に嘆願することを煽動する有力な団体となっていた」(Nkrumah,1957:51-52) (野間寛二郎訳による)。

西アフリカ学生同盟は、イギリスに留学する西アフリカ人学生を中心に、アジア、アフリカ、カリブ海域のナショナリズムが確かな胎動を始めていた両大戦間期にロンドンを拠点として設立された——黄金海岸のダンクァ、シクルマ、ナイジェリアのデイヴィス、アrikポ、バログン、ケニアのケニヤッタなどの卓越したナショナリストを生み出すことになった。また、黄金海岸のケースリー＝ヘイフォード、アコ・アジェイ、ジャマイカのガーヴィー、アメリカのデュボイス、英領トリニダードのパドモア、ナイジェリアのアジキウエなどの著名なパン・アフリカニストたちと出会う拠点でもあった (落合,1993:355-356)。

1925年に21名の学生有志によって設立された西アフリカ学生同盟の会員数は、37年には約170名、39年には約150名、第2次世界大戦中には減少したが、戦後とともに増加して、51年には約300名を数えたという（Garigue,1953:64;落合,1993:366）。これは、戦後、イギリスに留学する西アフリカの学生の数が女性を含めて急激に増えたことによるものである。戦前にはイギリスには約400名の植民地の学生がいた。1945年までに千人を超えるようになり、その3分の2がアフリカからで、その中でも圧倒的多数を占めていたのが西アフリカからの学生であった。これに対して、東アフリカからの学生は65名であった（Keith,1946:65-72;Adi,1998:121）。

ンクルマの下宿探しは戦後のロンドンでは極度に住宅が不足していたので難航した。

「ある日。私たちはタフネル公園のほうへでかけた。バーレイ街を降りていたとき、60番地で運だめしをしてみようときめた。あまり期待しないで、ドアをノックした。若い婦人がドアを開いて、何の用かと気安くたずねた。私たちのいうことを注意して聞くと、夫と相談するまでははっきりしたことはいえないから、午後にもう一度きてほしいといった。これで長い下宿探しが終わりになるかをあやしみながら、私たちは午後にもう一度この家をたずねた。ところがその通りになったのだ。私たちは家のなかに導かれ、10平方フィートほどの部屋へ案内された。食事なしの30シリングで自由に使ってよいといわれた。すべてが気持ちよく、部屋に家具のないことも気にならなかった。この小部屋が1945年6月から1947年11月までの私のロンドン滞在中の住居となった。家族はひじょうに親切で、私の身のまわりにもよく気をつけてくれた。私は一日中仕事をしていたので、真夜中前に帰ることはほとんどなかった。だが何時に帰っても、オープンの上にはいつも、なにか食べ物がおいてあった。家族の親切に報いるために、汚れた皿を洗わせてほしいと私は奥さんに申し出た。この皿洗いを、私は寝る前に規則正しくおこなった」（Nkrumah,1957:50-51）（野間寛二郎訳による）。

西アフリカ学生同盟は、1930年代後半から労働党(CPGB)やフェビアン協会（特にフェビアン植民地局FCB）との関係は「労働党議員やフェビアン協会員が頻繁にWASUのホステルを訪れ、学生たちと植民地問題に関する活発な意見をおこなう」（落合,1993:369）ほど、密接なものであった。また、ラディボ・ソランケの提案で、労働党議員、フェビアン協会員、WASU代表からなる西アフリカ議院委員会が設置され、西アフリカの諸問題が議論されることになった（落合,1993:360;Adi,1998:101-102）。

戦後になって西アフリカからの学生が増加するなかで、西アフリカ学生同盟は「保守党よりも進歩的な植民地政策を掲げ、絶えずWASUとの対話姿勢を示してきた労働党政権が戦後の植民地解放を前進させてくれるであろうこと」を期待して1945年7月の総選挙に協力をしたのである。WASUの書記長代理のデイヴィスとハロルド・ラスキ労働党執行委員長との間に交された書簡をみるとその期待がいかなるものであったのかがわかる。

デイヴィスは次のような手紙を書いている。

「来たる総選挙において、労働党が、全面的勝利をもって政権復帰を果たし、またこの

国の労働者により高い生活水準を道と、トーリー帝国主義に強く踏みにじられてきた植民地臣民を解放する道とを開いてくれることこそが、われわれの希望であり、また信念でもあります」。これに対して、ラスキは「もし、われわれが望んでいるとおり、今回の総選挙において労働党が成功を収めることができた際には、われわれは西アフリカの利益と、そしてなによりも民主的自由へのその運動とを維持促進するために全力を尽くしたいと願っています」と書いている(落合,1993:369-370;Adi,1998:132)。

学生たちは総選挙を支援した。選挙は、労働党 393 議席に対し、保守党 213 議席、自由党 12 議席という結果となり労働党の圧勝に終わった。デイヴィスはラスキに宛てて「われわれは、労働党の植民地政策に則り、いまこそ可能な限り速やかに西アフリカを自治政府へと向けて前進させる真の努力がなされるであろうことを固く確信しています」と書いている(落合,1993:370)。

シクルマは西アフリカ学生同盟と労働党との関係を次のように語っている。

「1945年に私がイギリスに渡った直後に、戦後第1回の総選挙がおこなわれて、労働党が保守党に勝った。西アフリカ学生同盟は、労働党が植民地問題をもっとも理解し、もっとも同情していると信じて、労働党を勝利させるためにできるかぎり手伝った。労働党の多くの黨員たちが学生たちに話をする機会をつくった。そのようなことから、有名な社会主義者たちと私は知り合ったが、そのなかにはA・クリーチ・ジョンズ(後の植民地大臣)やフェビアン植民地局のリタ・ヒンデルなどもいた。しかし遺憾なことに、労働党に対する私たちの希望はくだされた。事実私たちは労働党の政策に、保守党との違いを何ひとつ見つけることができなかった」(Nkrumah,1957:57-58)(野間寛二郎訳による)。

落合雄彦によると「WASUと労働党のこうした蜜月関係も、労働党政権の誕生以後急速に冷却化することになった。政権の座に就いた労働党は、植民地政策におけるそれまでの進歩的立場を一転させ、急速な非植民地化に慎重な姿勢を示すようになり、この労働党の『変節』が、戦後のアフリカ解放を熱望し、労働党政権にその希望を託していたWASUの学生を失望させ、労働党に対する猜疑心を生ぜしめる結果となったのである」(落合,1993:370)。

ソランケが西アフリカに派遣されて不在となる期間、西アフリカ学生同盟は左傾化を強め、さらに一部には共産主義へと傾斜する学生たちもあらわれはじめたのである。この後のソランケの行動については落合雄彦の論文に譲るとして、西アフリカの自治政府の誕生に希望を託した夢に対して「訪れる人も疎らな墓地の静寂のなかに森閑と立つその墓碑は、心なしかソランケ晩年の孤独さを表象しているかのように見える」という落合の言葉はとも印象的である。帝都ロンドンの寂しさ、冷たさ、したたかさを物語るものである。

4. 第5回パン・アフリカ会議

パン・アフリカニズムとは、政治学者のJ・S・コールマンによると「あるアフリカ人もしくはアフリカ系人がもっている、アフリカ大陸は民族的故国であるという信念、アフ

リカ大陸をアフリカ人のリーダーシップのもとに統合し独立させたいという願望，およびその信念と願望を拡大させようとする活動のことである」と定義されている (Coleman,1960:425;小田,1982:42)。

小田英郎は，パン・アフリカニズムの起源とカリブ海地域をとりあげた論巧のなかで，次のように述べている。

「19世紀末期のカリブ海地域に起源をもつパン・アフリカニズムは，第2次世界大戦までは，カリブ海地域，アメリカ合衆国のアフリカ系人の指導のもとで，欧米世界を舞台として展開され，第2次世界大戦後にその指導権をアフリカ・ナショナリズムに引き渡し，その活動をアフリカへ移したのであった」(小田,1989:157)。

カリブ海地域の指導者とは，シルヴェスター＝ウィリアムズ (Henry Sylvester Williams(1869-1926) であり，マーカス・ガーヴィー (Marcus Aurelius Garvey) (1887-1941) のことである。また，アメリカ合衆国のアフリカ系アメリカ人とは，W・E・B・デュボイス(William Edward Burghardt DuBois)(1868-1963) (あるいはもうひとつの系譜としてブッカー・T・ワシントン) のことであり，これらの指導者たちを経て，パン・アフリカニズムは第2次世界大戦後にインクルマ，ケニヤッタ，ニエレレなどのアフリカのナショナリストに継承されたのである。つまり，パン・アフリカニズムの運動は，アメリカ大陸の黒人ディアスポラとアフリカ大陸の黒人知識人のあいだの連携をもとに，それを組織的な動きへと発展させていくことになる。

シルヴェスター＝ウィリアムズについては，マリカ・シェアウッドが『パン・アフリカニズムの起源—ヘンリー・シルヴェスター＝ウィリアムズとアフリカン・ディアスポラ』(2011年)のなかで詳細に論じている。シェアウッドは，1900年に最初のパン・アフリカ会議を開催したものの，デュボイスによってパン・アフリカニズムの歴史から抹殺されてしまったシルヴェスター＝ウィリアムズの名誉回復を図るためにこの本を書いている。これらの概要について述べるのは本節の趣旨ではないので稿を改めて述べることにしたい (Sherwood,2011)。

小田英郎は我が国におけるパン・アフリカニズム研究のパイオニアである。小田英郎は，パン・アフリカニズムの政治史を書いているコリン・レーガムと同様に，シルヴェスター＝ウィリアムズによって開催された1900年パン・アフリカ会議を抹殺したW・E・B・デュボイスに対して異議申し立てをしている。「抹殺」という表現が適切ではないにしても，デュボイスが1900年のパン・アフリカ会議についてその著書でほとんど触れていないことは事実である (Legum,1962:31;小田,1982:66;小田,1989:163-164)。小田英郎はシルヴェスター＝ウィリアムズに関する記述がまったく見あたらないことについて次のように述べている。

「この会議に出席し，決議委員会委員長として「世界の諸国への請願」の起草にあたったことは，デュボイスのパーソナル・ヒストリーのなかでは取るにたらないことだったのであろうか。また，デュボイス自身がパン・アフリカニズムについてもっとも多く語っ

ていると思われる論文「パン・アフリカ運動」(1945年にパン・アフリカ会議国際議長の肩書で執筆)でも、1900年パン・アフリカ会議についてはわずか13行を割いているにすぎないのである。そのなかでデュボイスは1900年パン・アフリカ会議の経過をこれ以上簡単にできないくらい簡単に説明し、せいぜいのところ(中略)「ヴィクトリア女王の約束」と、「この会議が——〈パン・アフリカ〉という言葉をはじめて辞書のなかにもちこんだ」という点にその意義をもとめているにすぎないように思われる。そして、このような1900年パン・アフリカ会議に対する軽視は、その後1919年にデュボイス自身が組織したパン・アフリカ会議を第1回会議と呼称していることによっても明らかに示されている(小田,1982:66)(一部改変)。

小田英郎が述べているように、C・L・R・ジェームズとジョージ・パドモアというカリブ海地域と、ケニヤッタ、シクルマなどのアフリカのナショナリズムとが結びつくことを考えれば、パン・アフリカニズムの歴史のなかでシルヴェスター＝ウィリアムズの存在は無視することができないはずである。小田英郎やコリン・レーガムやマリカ・シェアウッドのように、1900年パン・アフリカ会議を第1回パン・アフリカ会議として、第5回パン・アフリカ会議を第6回パン・アフリカ会議とする記述方法もある。しかしながら、本稿では、すでに発表されているあまりにもぼうだいな著書や論文を考慮して、シルヴェスター＝ウィリアムズが1900年に主催したものを「最初のパン・アフリカ会議」と表記し、デュボイスが1919年に主催したものを起点として、慣例にしたがって、第1回パン・アフリカ会議(1919年)(パリ)、第2回パン・アフリカ会議(1921年)(ロンドン・ブリュッセル・パリ)、第3回パン・アフリカ会議(1923年)(ロンドン・リスボン)、第4回パン・アフリカ会議(1927年)(ニューヨーク)、第5回パン・アフリカ会議(1945年)(マンチェスター)と表記することをおことわりしたい。

小田英郎は、パン・アフリカニズムの歴史を、アメリカ、西インド諸島、ヨーロッパなどにおけるアフリカ系黒人の知識人の運動として「アフリカをはなれて展開された時期」(1945年以前の時期)と、「アフリカを舞台として植民地ナショナリズムと接合しつつ発展した時期」(1945年以後の時期)に大別している(小田,1982:43)。このように「アフリカをはなれて展開された時期」のパン・アフリカニズムは、アメリカ、西インド諸島、ヨーロッパなどにおけるアフリカ系黒人の知識人の運動として形成され展開されてきた。

小田英郎は、さらに、「アフリカ」を起点とすれば、1945年以前のパン・アフリカニズムを「アフリカなきパン・アフリカニズム」とし、1945年以後のパン・アフリカニズムは「アフリカ化されたパン・アフリカニズム」と大別している(小田,1982:47)。また、「時系列」を起点とすれば、前期パン・アフリカニズム(1900—1927年)、移行期におけるパン・アフリカニズム(1930—1940年代前半)、後期パン・アフリカニズム(1945—1963年)とも大別している(小田,1982:57-99;141-168;169-214)。

パン・アフリカニズムは、1945年以後、アフリカ・ナショナリズム運動と連動することでアフリカ化への道をたどることになるのである。これらの時期の分岐点となっているの

が、1945年10月13日から21日までにマンチェスターで開催された第5回パン・アフリカ会議である。この会議が重要なのは「アフリカの若い指導者たちの初めての会議であった」ということである。かれらは大部分が無名であったが、遠からずそれぞれの国で名声と権力を得ることになった人びとである (Legum,1962:31)。

第5回パン・アフリカ会議は、W・E・B・デュボイスと英領ギニア出身でありマンチェスターで開業していた黒人医師ピーター・ミリアード (Dr.Peter Milliard) を共同議長として開催された。デュボイスの経歴についてはすでに述べたのでここでは触れないが、ミリアードはハーワード大学医学部を卒業後にパナマで勤務した。その後、エジンバラでイギリスの医師資格を取得した。1930年代初めにマンチェスターに移住して国際エチオピア同胞団を創設している。1945年にはパン・アフリカ同盟の議長であるとともにマンチェスターの黒人協会の会長の要職にあった。

それでは第5回パン・アフリカ会議はどのようなものであったのだろうか。ンクルマは『自伝』のなかで次のように述べている。

「会議はたいへんな成功で、全世界から200名を超える代表が出席した。各植民地の状態についての報告があり、アフリカの植民地問題についての、資本家と改良主義者の主張は否認された。そして非暴力的積極行動の戦術によるアフリカ的社会主義という思想が満場一致で採択された。また〈人権宣言〉に表明されている根本思想を可決し、政治的自由と経済的発展をもとめる闘争を支援するために、全世界のアフリカ人とその子孫に、政党、労働組合、協同組合、農民組織に加盟するように勧告した」(Nkrumah 1957:52-53) (野間寛二郎訳による)。

第5回パン・アフリカ会議に出席したアフリカ関係者をあげるとガーヴィー未亡人のエイミー・A・ガーヴィー (Amy Ashwood Garvey) (1897-1969) がジャマイカ万国黒人向上協会を代表してこの会議に出席し、10月15日に開催された「ブリテンの人種問題」討論会の座長となっている。また、デュボイスは、10月16日に開催された「北・西アフリカの帝国主義」「南アフリカの抑圧」、17日に開催された「東アフリカの描写」「エチオピアと黒人共和国」、18日に開催された「カリブ海の問題」の討論会の座長をつとめている。なお、C・L・R・ジェームズ、ナイジェリアのアジキエが会議に参加していたと書かれている文献が数多くあるが、かれらはこの会議には参加していないことは注記しておきたい。

「黄金海岸 (ゴールドコースト)」からは、ンクルマ、アナン (J.S.Annan——ゴールドコースト鉄道労組代表。後にンクルマ政権の労働省常務書記長)、アイクミ (E.A.Ayikumi——後にンクルマ政権の大規模国家工業ディレクター)、ブユプラン (Edwin DuPlan——リバプール黒人福祉センター。後にンクルマ政権のアフリカ問題局の重鎮)、クランチェ・テーラー博士 (Dr Kurankyi Taylor——後にンクルマの政敵)、ジョー・アピア (Joe Appiah——後にンクルマの政敵)、ド・クラフト＝ジョンソン博士 (Dr J.C.deGraft Johnso——歴史家)、アシエ・ニコイ (G.Ashie-Nikoi——アフリカ原住民権利擁護協会代表兼西アフリカ・ココア農民協会代表)、アキ＝エミ (E.A.Aki-Emi——黒人労働者協会)、ハイド (C.D.Hyde——

黒人福祉協会) アウナー=レンナー夫人(アフリカ自由友好協会 Bankole Awooner-Rennerの妻)である。

「ナイジェリア」からは、ディヴィス(H.O.Davies——ナイジェリア青年運動代表。後にナイジェリア国営新聞代表), ウィリアムズ(Magnus Williams——アジキエの代理。後にナイジェリア・カメルーン国民会議代表), アキントラ(S.L.Akintola——バプティスト牧師。後にナイジェリア西部州首相), アウオロウオ(Obafemi Awolowo——ナイジェリア青年運動代表), ンデム(Eyo Ndem——カラバ向上連盟代表), コーカー(Chief A.Suyemi Coker——ナイジェリア労働協会代表), ブレーズ(F.O.B.Blaize——西アフリカ学生同盟)。

「シエラレオーネ」からは、ウォレス=ジョンソン(I.T.A.Wallace-Johnson——シエラレオーネ労働組合会議代表兼西アフリカ青年連盟シエラレオーネ支部代表), ソイヤー師(Rev.H.E.Sawyer——教員組合), サンコー(Laminah Sankoh——人民フォーラム)。

「ガンビア」からは、ダウンズ=トーマス(J.Downes-Thomas——ガンビア国民評議会代表), ガルバ=ジャフンバ(E.Garba-Jahumpa——ガンビア労働組合代表), 「トーゴランド」からはアーマトゥ(Dr Raphael Armattoo——詩人), 「リベリア」からは、トビィ(J.Tobie——進歩協会代表), ブロードハースト(R.Broadhurst——進歩協会代表), 「エチオピア」からはマコンネン(Otto Makonnen), 「ウガンダ」からはヤトゥ(I.Yatu——青年バガンダ代表), 「タンガニーカ」からはラヒンダ(S.Rahinda), 「ケニア」からはケニヤッタ(Jomo Kenyatta——キクユ中央連盟代表。後にケニア大統領), アウオリ(W.W.W.Awori——ケニア・アフリカ人同盟代表), 「ニヤサランド」からはバンダ(Dr Hastings Kamuzu Banda——アフリカ人国民会議代表。後にニヤサランド大統領), 「南アフリカ」からはエイブラハム(Peter Abrahams——南ア作家, 詩人), フルビ(Makumalo (Marko) Hlubi——国民会議代表)である(Legnum,1962:31-32;小田,1982:174;Sherwood .1996:125-144)。

シクルマはこの会議に参加し会議宣言の大部分を起草したとされている。「植民地諸国への挑戦」(The Challenge to the Colonial Powers)と題するものである。

「第5回パン・アフリカ会議」に出席した代表は平和を信ずるものである。数世紀にもわたってアフリカ人民が暴力と奴隷制の犠牲にされてきたとき、ほかになにを信ずることができるのであろうか。しかしながら、もし西洋世界が力によって人類を支配する決心をいまなお抱いているならば、たとえ暴力によってかれらと全世界とが破滅しようとも、アフリカ人は自由をかちとるために、最後の手段としての暴力に訴えなければならないであろう。われわれは自由をかちとろうと決意している。われわれは教育を要求する。われわれはいやしからざる生活をかちとる権利、すなわち自分の思想と感情を表現し、美の形式を選び創造する権利を要求する。われわれは、必然的な世界の統一と連合に従って諸集団・諸国民が自らを支配することがこの<一つの世界>で可能となるまでの間に限って、黒アフリカのための自治と独立を要求する。われわれは、長い間耐えに耐える民族であったことを恥じてはいない。われわれはひきつづき、自ら進んで犠牲をはらい、かつ努力している。しかしわれわれは、不正なる貴族政治と恥ずべき帝国主義とをわれわれの貧困と無知

とによって支えるべく世界の苦役をひき受けながら、これ以上飢えに苦しむ意志はもっていない。われわれは、資本の独占、私有財産法および私的利潤だけを追求するような産業を非難する。われわれは、唯一の真の民主主義として経済的民主主義を歓迎する。それゆえに、われわれは、告訴し、訴言し、そして問責する。われわれは、われわれの条件に関する諸事実に、世界の耳を傾けさせるであろう。われわれは、なしうるすべての方法をもって、自由、民主主義、そして社会的向上のためにたたかうであろう」(小田,1982:351-352)。

ンクルマは、「会議に出席したのは労働者、労働組合員、農民、協同組合員たち、アフリカ人とその他の有色人学生。しかしアフリカ人が出席者の大多数を占めていた」(Nkrumah,1957:53)と語っている。そして、マンチェスター会議では「植民地の労働者、農民および知識人に対する宣言」(Declaration to the Colonial Workers,Farmers and Intellectuals)と題して発表している。

「第5回パン・アフリカ会議代表は、すべての民族の自決権を信ずるものである。われわれは、すべての植民地諸民族が自らの運命を支配する権利をもっていることを確信する。すべての植民地は、政治的にも経済的にも外国の帝国主義的支配から解放されなければならない。植民地諸民族は、外国からの束縛なしに自らの政府を選ぶ権利を持つべきである。われわれは、植民地諸民族に対して、とりうるあらゆる手段を用いてこれらの目的のためにたたかわねばならないと呼びかけるものである。

帝国主義諸国の目的は搾取することにある。植民地諸民族に自治権をあたえることによって、この目的はうちくだかれる。したがって、植民地・従属民族による政治権力獲得のための闘争は、完全なる社会的、経済的、政治的解放への第一歩であり、かつそのために必要な前提条件である。それゆえに第5回パン・アフリカ会議は、植民地の労働者、農民に対して、効果的な組織づくりをやるよう呼びかけるものである。植民地の労働者は、帝国主義に反対する闘争の、前線に立たねばならない。諸君の武器——ストライキとボイコット——は無敵なのだ。

われわれはまた、植民地の知識人および専門職業階級に対しても、その責任に目覚めるよう呼びかける。労働組合的諸権利、協同組合を組織する権利、出版、集会、デモ、ストライキの自由、大衆の教育に必要な文献を発行し読む自由をたたかい取ることによって、諸君は自らの自由を手に入れ維持する唯一の手段を行使することになる。今日、効果的な行動への道はただ一つ——大衆の組織化——しかない。そしてその組織のなかで、教育ある植民地人民は提携しなければならない。世界の植民地・従属民族よ、団結せよ！(Padmore,1945:6-7;小田,1982:352-353) (小田英郎訳による)。

さらに、マンチェスター会議では次のような「国際連合機構への覚え書」(Memorandum to U.N.O.)と題して発表している。

「世界の有色人種がその代表を国際連合機構のなかに十分送りこめるよう要求した決議が、パン・アフリカ会議国際総裁W・E・バグハート・デュボイス博士によって国際連合事務局宛に提出された。同決議は以下のごとく述べている。

アフリカ黒人, および西インド諸島, アメリカ合衆国にいるアフリカ人の子孫たちの権利を代表しあるいは支援する下記の組織あるいは個人は, パン・アフリカが提唱した以下の提案を強く確認し, 謹んで付記するものである。

I 今日の世界にとって大いなる必要事は, 民主的な統治方法をもって人間行動を制御しようとする知的市民権である。

II 右のような市民権の確立にとっての最大の障害は, 植民地とくにアフリカ植民地における貧困と無知, そして疾病である。

III 植民地諸国, 博愛事業団, 布教団などによる前記状況克服のためのあらゆる努力, および黒人自身による努力にもかかわらず, 黒人がその窮乏, 要求およびかれらの当面している反対を周知せしめるうえで困難があるという事実のために, 進歩が妨げられている。加うるに, 黒人は自らの見解を表明するだけの知性を欠き, かつ帝国諸政府または自らの選択によらない他のスポークスマンによってはじめて代弁されうるのだという臆測が, 広く存在する。

IV かれらに関わるような国際連合の業務に, アフリカ植民地人民の指定代表を参加させるための規定を作ることは, 至当, 適切, かつ必要である。この原理の正しいことは否定しえない。現行の国際連合憲章で可能な, 最大限の参加を認める規定を作るべきである。そうすることによって, アフリカ人の苦情や要求は自由に表明されうる」

(Padmore, 1945:8-10; 小田, 1982:353-354) (小田英郎訳による)。

シクルマは『自伝』のなかで「アフリカ人が出席者の大多数をしめていたので, 会議はアフリカ民族主義——アフリカにおける植民地主義, 人種差別主義, 帝国主義に対するアフリカのナショナリズムの反逆——をイデオロギーとして, マルクス主義的社会主義を, その原理として採用した」と述べている (Nkrumah 1957:53) (野間寛二郎訳による)。

この意味で, 第5回パン・アフリカ会議は, 約半世紀近いパン・アフリカニズム運動の歴史のなかでもっとも政治化されたものとなった。また, アフリカのナショナリズムとも連動して新たな展開を迎えることになった。つまり, パン・アフリカニズム運動とアフリカのナショナリズムが相互補完的に連動することによって, アフリカの独立と統一という目標がアフリカの指導者たちの共通認識として形成されるようになったのである。シクルマは『自由のための自由』のなかで「ガーナの解放は全アフリカ大陸の全体的な解放と結びつかなければ無意味だと確信していました」「政府は, アフリカの独立と統一の政策を, わたしたちに可能な勇気と財源の全部をささげて追及するつもりであります。アフリカの全部が自由になり, 独立し, 統一されるまで, 永続的な平和は世界にありうるとわたしたちは信じます」(Nkrumah 2001(1961):133;197) と語っている (野間寛二郎訳による)。

注

1) ジェームズの『シクルマとガーナ革命』(1977年)は, 次のようなとても印象的な文章で書き始められる。

「1957年アクラで私はンクルマとガーナ革命について長い会談をした。アフリカの帝国主義に対して決して回復できないほどの一撃をあたえたガーナという国家の誕生で終わりをつげた黄金海岸での革命のことだ。この革命は世紀のもっとも重要なもののひとつであり、革命について語られる過去と未来の歴史にとっても最も重要な意義のあるひとつであると私はンクルマに話した。ンクルマも同じことを考えていたと私に話してくれたのだ。そこで最終的に私はガーナ革命のひとつの歴史を書くことにしたのだ。私自身も特にその資格があると感じた。彼がジョージ・パドモアと合流するためにロンドンにやって来る前に私はニューヨークでのンクルマを知っているのだから。パドモアは1935年から国際アフリカ事業局の創始者であり指導者だった。今日ではアフリカ解放の父として世界的に知られている。事業局の援助でンクルマが新しいアフリカをもたらす革命を準備するためにロンドンから黄金海岸にもどったのは1947年のことだ。私はすぐに執筆を始め1956年までにその歴史を完成した。このようにして私が書きあげたのが本書の第1部である。

私はアフリカ事業局から出版された『インターナショナル・アフリカン・オピニオン』という雑誌の編集長だった。パドモアもその重責を務めたが、パドモアは植民地解放闘争の親しい政治的同志でもあり西インド諸島の幼い頃からの友人である。独立闘争期にはパドモアはロンドンにおいて個人的な代理人となっていた。パドモアは論文や著書などでアフリカの独立闘争の展開について公けに記録を残している。パドモアと私は、ンクルマと議論をした1957年とともにガーナにいたのだ。私たちはガーナで1957年に起きたアフリカ革命について検証した。歴史のなかに書いたこと、20年以上もアフリカ問題に関わっているわれわれのサークルが最初の成功例としてアフリカ独立闘争の将来のについて考えていることを検討した。1957年までにこれらの諸問題へのアプローチがかなり信頼を得るものになった。パドモアの指導のもとで絶え間なく活動した。われわれは1935年には誤っていなかったのだ。1956年以來の出来事に修正を加える理由もない。したがって、1958年に書いたものが最新のものということになる」(James,1982(1977):9-10)。

文献

Adi,Hakim 1998 *West Africans in Britain 1900-1960:Nationalism,Pan-Africanism and Communism*,London:Lawrence & Wishart.

阿久津昌三 2011 クワメ・ンクルマの政治思想—『わが祖国への自伝』を読む, *法学研究* (慶應義塾大学法学研究会) 84(6):297-332。

阿久津昌三 2016 ディアスポラの知識人たちとの出会い—クワメ・ンクルマの政治思想 (二), *法学研究* (慶應義塾大学法学研究会) 89(2):261-288。

阿久津昌三 2021 グローバル冷戦史から見たクーデターの内幕—クワメ・ンクルマの政治思想 (三), *信州大学教育学部研究論集* 15:65-84。

ビュール, ポール 2014 *革命の芸術家—C・L・R・ジェームズの肖像*, 仲井亜佐子・星野真志・吉田裕訳, 東京:こぶし書房。

- Coleman, J.S. 1960 *Nigeria: Background to Nationalism*, Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Garigue, Philip 1953 "The West African Students Union: A Study in Culture Contact," *Africa* 23(1)(1953):55-69.
- Hogsbjerg, Christian 2014 *C.L.R. James in Imperial Britain*, Durham and London: Duke University Press.
- ジェームズ, C. L. R. 1937(1971) *世界革命 1917—1936 コミュンテルンの台頭と没落*, 対馬忠行・塚本圭訳, 名古屋: 風媒社。
- ジェームズ, C. L. R. 1938(1991) *ブラック・ジャコバン—トゥサン=ルヴェルテュールとハイチ革命*, 青木芳夫監訳, 東京: 大村書店。
- James, C.L.R. 1962 *Party Politics in the West Indies*, Port of Spain: n.p..
- James, C.L.R. 1968 "Document: C.L.R. James on the Origins," *Radical America* 21(4), pp.26-30.
- James, C.L.R. 1972 "Kwame Nkrumah: The Founder of African Emancipation," *Black World* 21(9), pp.4-10.
- James, C.L.R. 1958 *At the Rendezvous of Victory*, London: Allison & Busby.
- James, C.L.R. 1982(1977) *Nkrumah and the Ghana Revolution*, London: Allison & Busby.
- Keith, J.L. 1946 "African Students in Great Britain," *African Affairs* 45(179):65-72.
- 北原靖明 2012 *カリブ海に浮かぶ島 トリニダード・トバコ—歴史・社会・文化の考察*, 大阪: 大阪大学出版会。
- Legum, Colin 1962 *Pan-Africanism: A Short Political Guide*, London and Dunmow: Pall Mall Press.
- Marable, Manning 1987 *African and Caribbean Politics: From Nkrumah to Maurice Bishop*, London: Verso.
- Martin, Tony 1972 "C.L.R. James and the Race/Class Question," *Race* 14(2):183-193.
- マゾワー, マーク 2015 *暗黒の大陸—ヨーロッパの20世紀*, 中田瑞穂・網谷龍介訳, 東京: 未来社。
- Nkrumah, Kwame 1957 *The Autobiography of Kwame Nkrumah*, Edinburgh: Thomas Nelson and Sons Ltd, 1957 (わが祖国への自伝, 野間寛二郎訳, 東京: 理論社, 1960年)。
- Nkrumah, Kwame 2001(1961) *I Speak of Freedom*, London: William Heinemann (自由のための自由—アフリカは創造する, 野間寛二郎訳, 東京: 理論社, 1962年)。
- Olusanya, G.O. 1982 *The West African Students's Union and the Politics of Decolonisation, 1925-1958*, Ibadan: Daystar Press.
- Padmore, George 1936 *How Britain Rules Africa*, London: Wishart Books Ltd.
- Padmore, George 1937 *Africa and World Peace*, London: Martin Secker and Warburg Ltd.
- Padmore, George 1949 *Africa: Britain's Third Empire*, London: Dennis Dobson Limited.
- Padmore, George 1956 *Pan-Africanism or Communism? The Coming Struggle for*

Africa, London: Dennis Dobson.

Rosengarten, Frank 2010(2008) *Urban Revolutionary: C.L.R. James and the Struggle for a New Society*, University Press of Mississippi.

Sherwood, Marika 1996 *Kwame Nkrumah: The Years Abroad 1935-1947*, Legon: Freedom Publications.

Sherwood, Marika 2011 *Origins of Pan-Africanism: Henry Sylvester Williams, Africa, and the African Diaspora*, New York and London: Routledge.

落合雄彦 1993 西アフリカ学生同盟とラディポ・ソランケ, 小田英郎編, *アフリカ その政治と文化*, 東京: 慶應通信, pp. 355-377.

落合雄彦 1998a 青年ラディポ・ソランケ—その生い立ちから西アフリカ学生同盟の創設に至るまでの軌跡, *法学研究* (慶應義塾大学法学研究会) 71(1): 347-367.

落合雄彦 1998b 資料 ソランケへの書簡 パドモア, アジキウエ, アウオロウオ, *敬愛大学国際研究* 2: 205-219.

落合雄彦 2011 帝国の都のアフリカの家—ホステルからみたラディポ・ソランケという個体, 真島一郎編, *二〇世紀<アフリカ>の個体形成—南北アメリカ・カリブ・アフリカからの問い*, 東京: 平凡社, pp. 163-189.

小田英郎 1982 増補 *現代アフリカの政治とイデオロギー*, 東京: 慶應通信.

小田英郎 1989 カリブ海の初期パン・アフリカニストたち—シンヴェスター＝ウィリアムズとマーカス・ガーヴィー, 矢内原勝・小田英郎編, *アフリカ・ラテンアメリカ関係の私的展開*, 東京: 慶應義塾大学地域研究センター, pp. 155-182.

ウィリアムズ, エリック 1944(2004) *資本主義と奴隷制 経済史から見た黒人奴隷制の発生と崩壊*, 山本伸監訳, 東京: 明石書店.

ウィリアムズ, エリック 1964(1999) *帝国主義と知識人—イギリスの歴史家たちと西インド諸島*, 田中浩訳, 東京: 岩波書店.

付記

本稿は阿久津 (2011; 2016; 2021) の続編である。

(2021年 9月30日 受付)
(2021年12月28日 受理)